

京都見廻組与頭

剣鬼・佐々木只三郎

峰隆一郎



兄廻組与頭

鬼・佐々木只三郎



峰
隆
一
郎

峰 隆一郎(みねりゅういちろう)
1931年長崎県佐世保市生まれ。日本
大学芸術学部中退。フリーライター
等を経て、79年「流れ灌頂」で第五
回問題小説新人賞を受賞し、作家活
動を開始する。他の著書に「餓鬼が
斬る」「孤狼が斬る」「邪鬼が斬る」
「白狼の牙」「修羅の爪」「白蛇斬殺
剣」「剣鬼・仏生寺弥助」などがあり、
オリジナル出版点数は百を超える。

けん き さ さ き たださぶろう
剣鬼・佐々木只三郎

著 者 峰 隆一郎

発行者 見田清司

発行所 廣済堂出版

〒107 東京都港区赤坂6-17-5

電話 03(3584)7610(営業)

03(3584)6123(編集)

振替 東京 8 - 164137

印刷所 株式会社 廣 済 堂

〈編集担当〉小林龍之

©1993 峰 隆一郎

Printed in Japan

定価は、カバーに明示してあります。

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-331-05582-5 C0093

劍鬼・佐々木只三郎

目次

一章 講武所

5

二章 犬追物

39

三章 五千石旗本の娘

71

四章 清河八郎暗殺

104

五章 守護職

137

六章 見廻組八人

171

七章 島原遊廓

206

八章 龍馬暗殺

240

あとがき

解説

前島不二雄

一章 講武所

一

大君ノ儀、一心大切ニ存ズベシ

万延元年（一八六〇）六月――

この年の三月には、桜田門外の変があつた。大老井伊直弼いなおすけが討たれた。幕府の大老が暗殺されるなど、大事件であつた。

幕府内部は激しく動揺していた。大老が殺されるなど、もつての他である。大老の駕籠かごの供には、六十数人の侍がいた。それなのに二十人足らずの水戸浪士に襲撃され、大老を守りきれなかつたのだ。油断である。責められるべきは、六十余人の侍たちである。

この日は雪だった。そのために侍たちは、刀の柄に袋をかけていた。これがすべての原因である。

佐々木只三郎は、両国広小路の雑沓ざつとうの中を歩いていた。直参じきさんではあるが五十俵三人扶持ふちの御家ごけ人である。暇はあるが金はない。何か内職をしなければ食ってはいけない。

御家人や下級旗本は、たいいてい内職で糊口ここうをしのいでいた。何とか食っていけるのは、旗本五百石以上である。それ以下は貧乏であった。五十俵と言え、五十石ほどである。五百石の十分の一である。

只三郎は江戸に来て間もなくだった。このときすでに二十七歳になっていた。まだ嫁ももらえない。

「佐々木さま」

声をかけられて足を止めた。二十四、五とみえる女が立っていた。どこかで見たような顔だった。

「お忘れですか」

と女は笑った。

「喜代です」

そう言われてもわからない。頭の中に喜代という女を探す。出て来ない。

「会津若松で」

と言われて若松に焦点をしばった。それでも出て来ない。

「すまぬ、思い出せぬ」

困惑した顔になった。

「雪の日でございました。あなたさまの雪駄せうたの緒がきれて。わたしが上げてさし上げました」

「思い出した。そなたであつたか」

あのと き名は聞いた。喜代と言つたかどうかは忘れた。

「そうか、あのと ときの、喜代さんだつた。江戸に出て来ていたのか」

「はい、いろいろと事情がありまして。お急ぎでなかったら、わたしの住まいにおいでになりませんか。狭いところですが」

用などというものはない。暇ならばあり余るほどある。もて余している。どうかしなければならん、と思ひながら、江戸には馴染なじみみがないのだ。

「お話もしたいし」

「ならば邪魔するか」

両国橋を渡つた。そして本所の奥に入っていく。亀沢町の裏店うらだなに住まいがあつた。小さな家である。どうぞと云われて家の中に入る。二間だけの家である。それに台所がついている。只三郎の住まいとたいして変わらなかつた。

浅草せんそうの浅草寺せんそうじの前に組長屋がある。それが住まいだつた。

障子を開ける。小さな庭がある。その向こうは原っぱのようだ。馬場である。濡れ縁ぬれぐさに向いて坐る。

「少し待つて下さいな」

と言って台所に行く。酒の用意をする。それを改めて見た。姿のよい女だ。水商売でもしているのだろう。色香はあった。こんないい女だったのかな、と思うくらいだ。

喜代は、酒膳を運んで来た。膳の上には、湯呑み茶碗ちやわんが乗っている。冷酒だ。小皿に漬け物があった。

「お冷で」

「なんのけっこう」

喜代は酒徳利をもって来た。

「吞んでいて下さい。わたしは湯屋に行つて来ますので」

女は、店に出る前にたいてい湯屋に行く。喜代は家を出ていった。おかしな女だな、と思う。

若松の話でもしたいので、住まいに誘つたのだと思つた。

暇をもて余している。少々待たされても、たいしたことはなかった。茶碗を手にする。只三郎は、ふふつ、と笑つた。ここ数カ月は酒の匂いにおも嗅かいだことがなかった。酒を吞める金などなかった。

酒を口につけ、吞んでみる。それを咽に通す。久しぶりの酒だった。酒にありつけたという感じだ。

只三郎は、会津若松で、佐々木源八の三男として生まれた。父源八は藩の与力として勤めていた。暮らしはいまとたいして変わらない。

長男の直右衛門は、手代木家のあとを継いだ。次男の主馬が家を継ぐ。四男は源四郎という。

三男の只三郎はずっと若松で暮らしていた。四歳のときから、藩の剣術師範、羽島源太に剣を学んだ。神道精武流という。

毎日、打ち傷、切り傷がたえなかった。剣術にのめり込んだ。剣術以外にはやることもなかったのだ。もちろん藩士らしく学問も習った。

もののにのめり込む体質だったのだろう。家中でも剣術をやる者はそれほど多くはなかった。

精武流は小太刀が主流になっていた。只三郎は筒胴をしていた。筒胴とは、胸周りが筒のように丸いことを言う。つまり武芸向きの体ということである。

体質も合っていたのだろう。二十歳になったころには、師羽島をものぐ腕になっていた。会津では知らぬ者がいないほどに名を上げた。

会津藩は、他の藩とは違って、特殊な思想を持っていた。藩祖は、保科正之である。正之は、二代將軍秀忠ひでただがお静という女に生ませた子である。正之が長ずるまで、秀忠は正之を公にはしなかった。

大権現家康が他界し、正室のお江え与の方も死んだ。そこでようやく世に出て来たのである。そして会津二十三万石を与えられた。

正之は徳川家に忠実だった。四代將軍家綱の補佐役として勤めて来た。

会津には、家訓十五条がある。その一つに、

『大君（將軍）ノ儀、一心大切ニ存ズベシ。忠勤シテ、列国（諸藩）ノ例ヲモツテ自ラ処スベカラズ。モシニ心ヲ懷クアラバ、ワガ子孫ニアラズ。面々、決シテ従ウベカラズ』

がある。

面倒な文章だが、簡単に言えば、会津家の殿さまよりも、將軍家を大切にせよ、ということだ。殿さまの命令よりも、將軍家の命令のほうが大事だ、ということになる。

その思想を代々堅めて来た。のちの会津戦争の松平容保は、この思想の上に立っている。だから徹底的に薩長軍と戦った。

只三郎も、この思想を吹き込まれた一人である。会津のためではなく、將軍家のために働けということだ。

江戸の旗本たちは、そのような教育は受けていない。だから、旗本、その子弟などには將軍のために死ぬ、という考え方はない。

只三郎は、ゆっくりと酒を呑む。酒は酔うものではなく味わうものである。

「おい、喜代はいるか」

と男の声がした。そして返事も待たずにドシドシと上がって来た。そして酒を呑んでいる只三郎を見ると、

「何だ、おまえは」

三十すぎとみえる浪人だった。

「何だとは何だ。立ったまま口を利くとは、礼を失する」

「何だと、利いた風な口を利きおって」

「そのほうが、喜代さんの何かは知らぬが、礼を知れ、礼を」

「おのれ、許さん」

浪人は刀柄に手をかけた。とたんに只三郎は動いていた。早かった。浪人の手首を掴むと投げた。浪人は庭に転げ落ちる。

「ちくしょう」

と浪人は立ち上がり、刀を抜いた。只三郎はゆっくり素足のまま庭に降りる。浪人が刀を振る上げる。つつつと体を寄せた。右手首を掴む。

それをひねって背中に回す。ひねり上げておいて、肩をトンと叩いた。

「ギヤッ」

と叫んで、腕から力がなくなった。肩から骨が外れたのだ。次に左手首を掴んだ。浪人の目に恐怖が走った。右腕も背中にひねり上げた。

「ギヤーツ」

と叫ぶ。肩を叩く。左腕も外れた。地面に落ちた刀は、鞘にもどしてやった。

「今度、この家に来たら、命はないものと思うんだな。わかったか」

と浪人の顔を覗く。

「両腕で足りなかったら、足の骨も外してやる。わかったのか」

「わ、わかった」

「喜代はわしの女だ。手出しはさせん」

肩を押してやった。浪人は背を向け、両手をぶらぶらさせて庭伝いに歩いていく。

振り向くと、畳にお喜代が坐っていた。

「申しわけありません、お許し下さい」

と額を畳にこすりつける。

「そうか、喜代さんは、あの浪人をわしにこらしめてもらうために、この家に誘ったのだ」

「はい、申しわけありません。若松で、佐々木さまの勇名は聞いておりました」

「なるほどな。そう頭を下げずともよい。あの浪人とは別れたかったのだな」

「はい、わたしを手込めにしてお金をせびります」

只三郎は縁に坐る。喜代は雑巾ぞうきんをもって来て、足を拭ぬぐった。畳に上がると酒膳の前に坐って、茶碗を手にする。

「女の一人暮らしというのはいかんな」

「若松から駆落ちして来ました。でも男は死んでしまいました。いまさら若松にもどるわけにはいきません」

「喜代さんなら、男はいくらでもできるように」

「そう、うまくはいきません」

「氣に入った男はいない、ということだな」

はい、と言って掬すくい上げるような目で只三郎を見る。体を寄せて来て酒德利を手にする。茶碗に酒を注ぐ。

「もし、わたしでよければ、抱いて下さい」

と小さな声で言った。渡りに舟である。女の体には飢えていた。

「喜代さんは、充分にきれいだ」

「うれしゅうございます。わたしは若松のころから、佐々木さまに憧れていました」

「なに、それははじめて聞くぞ」

「わたしのような女が、そのようなこと申し上げられるわけはありません」

「藩士と言っても微禄だ。喜代さんとそれほど違うわけではない」

「でも、おさむらいでございます」

微禄でもさむらいには変わりはない。

喜代の体を抱き寄せて、着物の上から胸を押える。弾力が手に伝わってくる。衿元から女が匂って来た。こうして女の匂いを嗅いだのは何年ぶりか。

衿の間から手を入れる。このことを予期してか、帯はゆるめに締めてあった。手を入れて乳房を手に包み込む。

「あ、うれしい」

と声をあげた。思ってもみないところにこんな女もいたのだ。膨みは手に余った。思わず、声をあげそうだった。それほどに女に飢えていたのだ。

乳房を揉み上げる。これまでは、女の胸の膨みをじっと見ていたような気がする。いま乳房に触れているのが信じられないような気がする。この膨み、柔らかさ、肌のぬくもり、すべてに憧れていたのだ。

乳房を揉みしだくと、喜代は氣を荒くする。腰のあたりがぐねった。この感触が欲しかったのだ。

もちろん、この年まで女がいなかったわけではない。女はいた。だが、いつも抱けるといいうわけではなかった。だから、体はいつも飢えを覚えていた。体だけではない。頭も飢えていた。

女を見れば、乳房とはざまを思い描く。女の股間に手を入れてみたいと思う。だが、そういう思いは、じつと押さえつけていなければならないのだ。もの欲しげな顔はできなかった。

武士は食わねど高楊枝、という。女に飢えた顔はできない。女などあり余るほどいるという顔をしていなければならない。それが武士なのだ。

裾から手を入れた。足首から脛を撫でる。膝から、腿に手をのばす。なめらかな感触にゾクリとなる。はざまを探りたい。だがいきなり手をのばしては下賤だ。

喜代の体は逃げはしない。いきなり体をつなぐほど若くはないのだ。落ち着け、とおのれに言い聞かせる。喜代は男に馴れている。十七、八だったら、いきなりでよいのだろうが、この年になってあわてたら、喜代に笑われそうだ。

内腿を撫でまわす。頭の中はブーツとしていた。やっと女の体にありついた。そういう気分である。

はざまにのびそうになる手を引っ込める。女には足りている。そういうふりをしていなければならない。だが、こらえきれずに、はざまに手を触れた。そこもまたツルンとしていた。

憧れのはざまに触れたのだ。上下に撫でる。指を折ると、切れ込みに滑り込んだ。アーツと溜